

葛飾や一弟子われに雁わたる

藤田湘子

十七歳の青年湘子が師に選んだのは、虚子の『ホトトギス』を昭和六年に離れた水原秋櫻子であった。自分の感性と似たところがあり、その抒情性や明るさ、爽やかさ、潔癖性を好ましく思ったようだ。

しかし、湘子は、昭和四十三年に『馬酔木』を離れ、その後色々あったが、秋櫻子も亡くなり、後年思い返せば、その師事した期間の教えの大切さは痛烈に、そして、師恩もしみじみと感じている。

常に自分を冷静に捉え、生涯に「一弟子」と名乗ることのできる俳句の師を得ることができた幸運。

秋櫻子の詠んだ葛飾の「桃の籬」の春に対して、「雁わたる」の秋を配して追慕の情を示している。